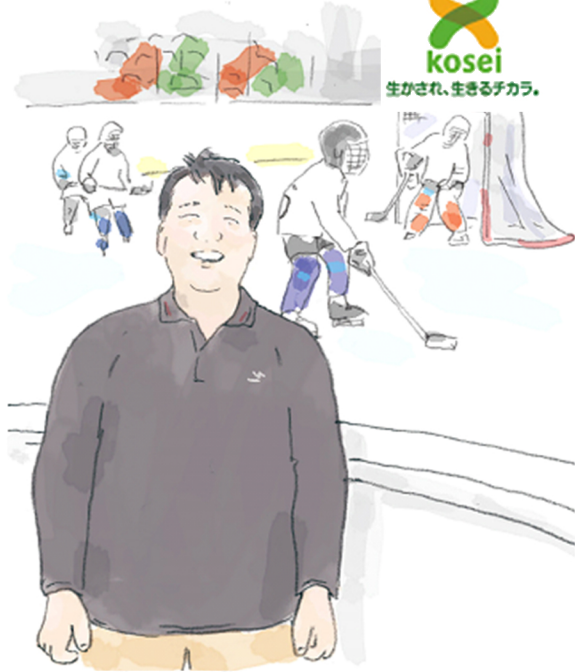


苦悩を経て見えはじめた未来

北広島教会 山西康友さん

山西さんは24歳のとき、オートバイ運転中の事故で右足に重傷を負ってしまった。それは、就職したオートバイの輸入・販売会社での仕事に邁進し、同時に、子どもの頃から続けていたアイスホッケーで国体出場を目指していたときだった。退院後に広島の実家へ戻ったが、自分の不運を嘆き、悶々とした日々を過ごしていた。そんなとき、「諸行無常」を学んだ。仏教では、過ぎ去ったことにとられることなく、起きてもない未来について、あれこれと考えるのではなく、「いま」を大切に過ごすことが幸せへの道だと説いている。この教えを胸に刻んだ山西さんは、ペット用品の輸入販売の仕事をはじめ、さらに、地元の子どもたちにアイスホッケーを教える機会を得た。練習後、子どもたちに必ず伝えることがある。「アイスホッケーができることは当たり前じゃない」「帰ったら、ご両親に『ありがとう』と言おう」——それは、苦悩を経て心に据えた山西さんの指針でもある。



苦悩を生むもとを知る——智慧①

「遊んでいるときには／せまいせまいというて／遊んでいる／朝会るときに石を拾わされると／広い広いというて／拾うている」。これは、ある小学四年生が書いた詩ですが、六波羅蜜の「智慧」とは何かを考えるうえで、すべての人に通じる大切なことを教えています。確かに私たちには、同じ運動場でも「遊んでいるときには／せまいせまい」と文句をいい、「石を拾わされると／広い広い」と愚痴をこぼすような、「思いどおりにしたい」というわがままな心があつて、それが苦しみや悩みを生むもとになっています。

そこで釈尊は、欲望や執着をコントロールする「智慧」を身に付けるヒントを残されました。「自我に固執する見解をうち破つて、世界を空なりと観ぜよ」というのです。要するに自分勝手な思いや都合で「せまい」とか「広い」と評価したり、価値判断したりするのはやめようということです。事実を素直に受けとるのです。そうして持ち前の「智慧」をはたらかせて、澄みわたる秋空のような清々しい気持ちで、他者を思いやる菩薩としての歩みに、お互いさま自信をもってふみだしましょう。

